



〈連載(247)〉

爆発的に成長する欧州域のクルーズマーケットを見る



大阪府立大学大学院・海洋システム工学分野・教授
池田 良穂

去る7月末の深夜、筆者は関西空港からイタリアへ向う飛行機に乗った。セレブリティ・クルーズの新造船「セレブリティ・シルエット」のお披露目クルーズに招かれ、チビタベッキア港から出る2泊の無寄港クルーズに乗船する機会に、クルーズハブ港として急進中の同港の調査を行うためである。

事前のインターネットでの調査によると、同港のクルーズ客船の入港数は1996年に50隻余りだったのが、2003年には500隻、そして最近では750隻を越しているという。750隻といえば、年間を通じて毎日平均2隻入港している勘定だ。地中海クルーズのシーズンは春から秋だから、その期間にはたくさんの客船で賑わっているはずだ。

この港には、以前にフェリーの視察で数度訪問しているが、ローマの外港でサルジニア島へのフェリー基地として機能する小さな港という印象しかない。そこが、地中海クルーズの一大ハブ港として躍り出たのだから驚きである。ぜひともその港湾戦略を知りたいと思っていた。

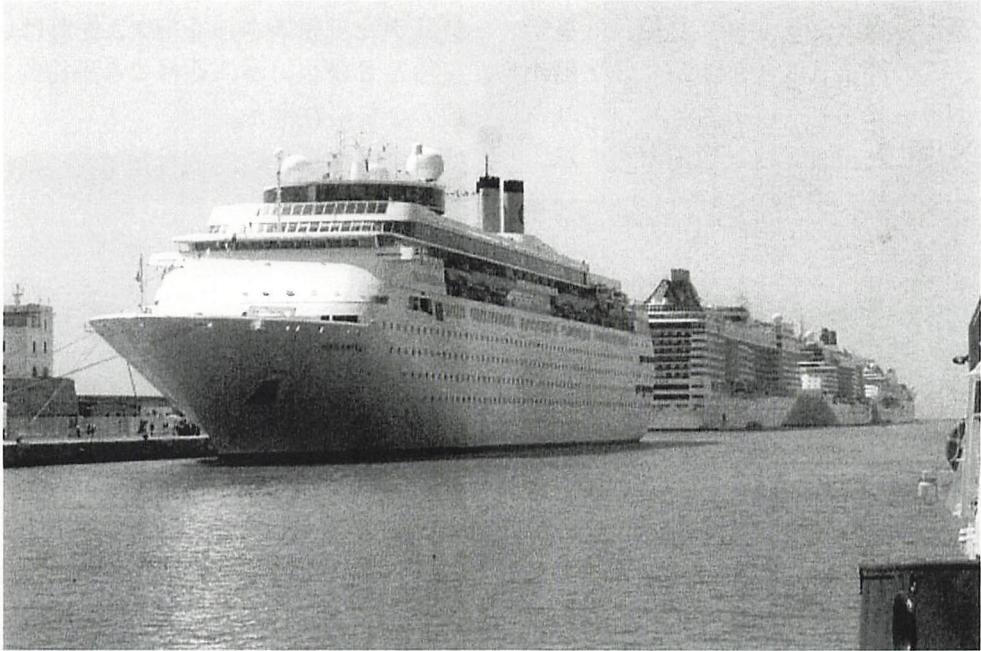
ローマ空港は、地中海に面した海岸近くにあり、ちょうど内陸のローマとチビタベッキアの間に位置する。ローマまで列車で30分、そしてローマからチビタベッキアまで列車で1時間20分ほどだ。ローマ空港に降り立ったのは午後の3時過ぎ。ローマ経由で列車でいけば2時間以上かかるから、明るい間に港を調査することはできそうにない。しかし、調査が1日欠けても、その実体を正確に掴むことは難しくなる。5日間の滞在中のできれば全ての日の状況を調査したいと思っていた。

そこでタクシーで行くことにして、案内所で聞くと、料金は150ユーロほどで、時間は30~40分だという。清水の舞台から飛び降りた気持ちで、黒塗りのベンツのタクシーに乗り込んだ。

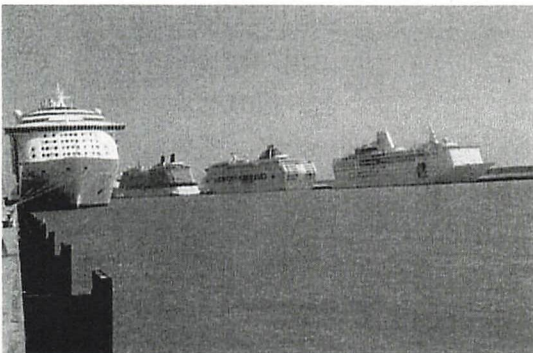
美しい海岸線に沿った高速道路を走るタクシーでのドライブは快適だった。まさにローマ郊外のビーチリゾート地帯であった。チビタベッキアの町に近づくと、数隻の白いクルーズ客船の姿が目飛び込んできた。胸の鼓動が高まる。

タクシーで予約していたホテルに到着し、荷物を置いて、カメラバッグだけを持って港へと走った。防波堤の内側を利用した2キロ余り岸壁に、「コスタ・ロマンティカ」、「MSCファンタシア」、「セレブリティ・イクノス」、「オセアナ」、「アイランド・エス

ケープ」の5隻がずらりと並び、さらに対岸のコンテナターミナルの一角も客船ターミナルになっていて、RCIの「マリナー・オブ・ザ・シーズ」が着岸していた。すなわち全部で6隻が入港していた。これら6隻は18~19時の間に次々と出港していった。



1日目)左から「コスタ・ロマンティカ」、「MSCファンタシア」、「セレブリティ・イクノス」、「オセアナ」、「アイランド・エスケープ」。



1日目)左が「マリナー・オブ・ザ・シーズ」。沖側の防波堤の内側の岸壁に停泊するのは、左から「セレブリティ・イクノス」、「オセアナ」、「アイランド・エスケープ」。

2日目の朝、6時を過ぎると明るくなってきたので、6時半頃に港へ向った。ホテルから歩いて5分と極めて便利。HALの「ノールダム」と、セレブリティの「セレブリティ・シルエット」が既に着岸しており、プリンセスクルーズの「グランド・プリンセス」が港内で回頭して、「ノールダム」の隣の岸壁に着岸した。「グランド・プリンセス」は船尾の最上階にそびえていたディスコが撤去されていて、だいぶ印象が変わった。さらに港口にクルーズ客船の頭が見えて、それは「グランド・プリンセス」の姉妹船の

同じプリンセスの「ルビー・プリンセス」であった。同船は港外で回頭し、バックで入港して一番港口の岸壁に着岸。タグボートもなしに、バックで入港するのに驚かされる。

続いて小型クルーズ客船「シー・ドリームⅡ」が入港して来て、一番奥の岸壁に着いた。この日の入港クルーズ客船は5隻であった。この間に、3隻のサルジニア島からの大型カーフェリーも入港してフェリー埠頭に着岸した。まさにビジーポートだ。



2日目)左から「ノールダム」、「グランド・プリンセス」、「ルビー・プリンセス」と入港してくる「シー・ドリームⅡ」。左の入港船はサルジニア航路のカーフェリー。

この日の午後には「セレブリティ・シルエット」に乗船して、二泊のクルーズに出たので、3日目の同港の入港クルーズ客船は確認をすることができなかった。

4日目の早朝4時に「セレブリティ・シルエット」はチビタベッキア港に戻った。夜が明けてから、キャビンのベランダから36,000トンのクルーズ客船「トムソン・ディスティニー」が入港してきた。この船は、元RCCLの「ソング・オブ・アメリカ」で、カリブ海クルーズの第2世代船としてクルーズ客船の大型化競争の口火を切った船で、

筆者がカリブ海で初めて、新しいビジネスモデルである現代クルーズを体験した船でもある。カリブ海クルーズから引退した後、マヨルカ島起点の格安フライ&クルーズに就航して、イギリスのクルーズマーケットの拡大に寄与した立役者となった。

この日のクルーズ客船は、同船と「セレブリティ・シルエット」の2隻だけで、ちょっとさびしいが、それでも平均的な入港数の2隻の在港だ。



4日目)左は「セレブリティ・シルエット」、右は「トムソン・ディスティニー」。

5日目の午後には帰国のためにローマ空港を離れることとなっていたが、6時から港へと出かけた。改造クルーズ船「マイン・シッフ」は、6時前には入港していたようで、しかも土砂置場の埠頭への着岸していた。やがて次々と6隻のクルーズ客船が1時間半余りの間に入港して来た。すなわち、この朝は、「マイン・シッフ」も入れて7隻のクルーズ客船が在港であった。

RCIの2隻は、「プリリアンス・オブ・ザ・シーズ」と「アドベチャー・オブ・ザ・シーズ」。ディズニー・クルーズのユニークな煙突の「ディズニー・マジック」、ドイツのアイダ・クルーズの「アイダ・ビタ」、コスタの「コスタ・メディタラネア」、プル

マンツルの「ソブリン」。この「ソブリン」は、元RCCLの7万総トン時代の幕を開けた「ソブリン・オブ・ザ・シーズ」だ。前述の「ソング・オブ・アメリカ」と共に、「現代クルーズ」という新しいクルーズのビジネスモデルを筆者に教えてくれた船だ。この2隻が、船齢40年と20年という老体に鞭打って、欧州のクルーズマーケットの急拡大の立役者として活躍していることに感動した。

最後に、チビタベッキアと日本の意外な関係について書いておきたい。同港に滞在した期間、毎晩、ホテルの近くのレストランを渡り歩き、美味しいイタリア料理を堪能したが、ある日、港を見渡せる丘の上のレストランで食事をして、港の近くのホテルまで帰る間に1つの銅像に出くわした。なんと刀をさした武士の銅像である。これ

が伊達藩の支倉常長の銅像で、実はチビタベッキアは1615年に遠路ローマまで来た時の上陸地であったのである。



1615年にローマ法王に謁見した支倉常長の像



5日目)左から「ブリリアンス・オブ・ザ・シーズ」、「コスタ・メディタラネア」、「ディズニー・マジック」、「アドベンチャー・オブ・ザ・シーズ」。右には後進入港中の7万トン型の「ソブリン」。港外で回頭して、2km以上タグボートもなしに後進で入港・着岸した。